

# マフディ教徒の反乱, ボーア戦争と D.H.ロレンス

倉持 三郎

(平成 13 年 10 月 4 日受理)

## The Mahdist Rebellion, the Boer War, and D.H. Lawrence

Saburo KURAMOCHI

(Received on October 4, 2001)

キーワード : マフディ教徒, ボーア戦争, D.H.ロレンス

Key words : Mahdist, Boer War, D.H.Lawrence

### 序

1883年, エジプトの属州, スーダンでマフディ教徒の反乱が起こった。これを平定に向かったゴードン将軍は, 1885年, 反徒のために殺害された。1898年, キッチナー将軍は, マフディの反徒を撃滅した。ボーア戦争(南アフリカ戦争)は1899年に始まり1902年に終わった。こういう戦争は大英帝国のアフリカ植民地化政策から生じたものである。この背後にはヨーロッパ列強のアフリカ争奪戦があった。

ボーア戦争から100年たつ。この戦争は大英帝国崩壊のきっかけになったものとしても重要な意味をもつ。当然, イギリス政治, 社会, 文学においても大きな影を落としている。ある者は賛成し, ある者は反対した。文学者ではトマス・ハーディは, 戦争の悲惨を詩に書いて発表した。それは反戦詩であると非難された。本論では, D.H. ロレンスの作品, とくに『虹』(*The Rainbow*, 1915)をボーア戦争を頂点とするアフリカ争奪戦と関連させて読んでみたい。

### 1 マフディ教徒平定と『虹』

マフディ教徒の反乱とボーア戦争に言及しているのは『虹』である。

まず、『虹』の執筆年代をみておきたい。4つの時期に分けることができる。1. “The Sisters”として, 1913年3月から6月執筆。2. “The Sisters”として1913年8月

から1914年1月執筆。3. “The Wedding Ring”として1914年2月から5月。4. “The Rainbow”として1914年11月から1915年3月。これを見ると, 最終原稿は第一次大戦中に執筆, 訂正されたことが分かる。

『虹』の女主人公, アーシュラ・ブラングエン(Ursula Brangwen)はマフディ教徒の反乱が起こった1883年に生まれ, ボーア戦争の始まった1899年10月には15歳か16歳である。(1885年9月生まれ作者ロレンスは, 戦争の勃発した時点で14歳である)。

アーシュラの恋人役の男性, アントン・スクレベンスキー(Anton Skrebensky)が登場するのは, 第11章「初恋」においてである。そのときアーシュラは16歳で, スクレベンスキーは6歳年上である。彼女の祖母の親戚のスクレベンスキーは休暇をもらってブラングエン家を訪問した。アーシュラはスクレベンスキーと親しくなる。

スクレベンスキーは「工兵隊」に属する軍人である。軍人ということを知って最初からアーシュラは反発するわけではない。「神の子」(R 257)のひとりと思ったりする。また, 彼と知り合うことで世界が広がったように思う。「彼は彼女に広い世界, 遠方の世界, 多数の人間の存在を感じさせた」(R 272)最初は, 彼はプラスのイメージなのである。だがアーシュラは次第に彼に反発し, 批判するようになる。

アーシュラとスクレベンスキーの間には次のような会話が交わされる。(この時点は1899年夏である。この年の10月にボーア戦争がはじまる)ハルトゥームのことが話題になる。アーシュラはスクレベンスキーに向かって戦争の無意味さを言う。

「あなたは兵隊が好きですか」とアーシュラは聞いた。「ぼくは正確には兵隊じゃないよ」と彼は答えた。「でも戦争のためだけに物事をしているんでしょう」と彼女は言った。

「そうだよ」

「戦争に行きたいですか」

「ぼく？ そうね、胸がわくわくするだろうね、戦争が起きれば行きたいね。

.....

「なぜ戦争が、ほかのことより重要なのか？」と彼女は聞いた。

「殺すか、殺されるかのどちらかなのだ。殺すことは重大なことだと思うよ」

「でも、あなたが死んでしまったら、あなたとは関係なくなってしまうでしょう」

彼は一瞬沈黙した。

「でも問題なのは結果なのだよ」と彼は言った。「われわれがマフディを平定できるかどうかの問題なのだ」

「あなたにとって、そして私にとっては問題ではないわ。私たちはハルトゥームなんか気にしないわ」

(R 288)

後述するが、ハルトゥームは「マフディ」の率いるイスラム軍に包囲され、ゴードン将軍が、1885年に敗死したところである。このあと、キッチナー将軍が1898年9月にマフディを平定した。このアーシュラとスクレベンスキーの会話は、その翌年、1899年の夏のものである。軍人であるスクレベンスキーにとって最大の関心事であった。<sup>1)</sup>

次のような会話が続く。スクレベンスキーは言う。

「あなたは住む場所をほしがっている。だれかがその場所をつくらねばならないのだ」

「でも、私はサハラ砂漠の真ん中に住みたいとは思わないわ。あなたは住みたいの？」

敵意をこめて笑いながら答えた。

「ぼくだった住みたいくはないよ、でも住みたい人を支援しなければならない」

「なぜそうしなければならないの？」

「国家があるからそうするのか」

「でも私たちは国家ではないわ。国家だと自認する人たちは山ほどいるわ」

「ほかの人たちも自分たちも違うと言ったとしたら」

「みんながそう言うなら国家はなくなるわね。でも私が私だということは変わりはないわ」(R 288)

国家が消滅しても個人にかかわりがないとして国家の存在意義を認めないアーシュラと、国家主義のスクレベンスキーの決定的な断絶がここにある。

「私は兵隊さんがきらいよ。堅くて木材みたいだもの。本当のことをいって何のために戦争するの？」

「私は国家のために戦争したい」

「でもあなたは国家ではないんでしょう。あなたとしては何をしたいの？」

....

彼女は答えた。「あなたは私には無のように見えるわ。あなたのいるところには無しかないわ。本当にあなたは存在しているの？ あなたは無のように見えるわ」(R 289)

前述の文章を引用しながらリーヴィスは次のようにいう。

スクレベンスキーの恋人としての不十分さと、彼の「公共の精神」、つまり人生の究極の意味として社会的働きをよき市民として受け入れることのあいだの関係は十分に表現されている。具体的に示されていると言ってよい。「あなたは私には無のように見えるわ」というアーシュラの判断は十分に意味をもっている。(Leavis 140)

リーヴィスもアーシュラの立場に立って、国家のために戦うことにしか存在の意味を見出すことができないスクレベンスキーを批判している。たしかにスクレベンスキーはそのような軍人として描かれているが、本論ではこういう議論のコンテキストを見たい。

この会話が交わされた前年、1898年にキッチナー将軍がマフディ教徒を破った。その背後にはイギリスのアフリカ進出と現地人の反発があった。

マフディ教徒反乱の発端は、1875年のイギリスのスエズ運河株買収にさかのぼる。イギリスはフランスとともに、エジプトの内政に干渉しはじめたことで、現地人の反英感情がたかまった。1882年、アレキサンドリアで反

英暴動が起り、約50名のヨーロッパ人居留民が殺害されるとイギリスは出兵してエジプトを占領した。翌、83年、エジプトの属領であったスーダンで、マフディ教徒の反乱が起こった。マホメド・アームドはみずからマフディ(イスラム教の救世主)と称した。

鎮圧しよとして進軍したエジプト軍は、待ち伏せにあい敗北した。イギリス首相、自由党のグラッドストーンは、スーダン放棄を決意してエジプト守備隊を撤退させるため、中国の太平天国の乱を平定したゴードン將軍を派遣した。將軍は政府の訓令に従わず、反徒撃滅を目指した。1884年9月、反乱軍をバーバーから駆逐したが、ハルトゥームで包囲された。平和主義のグラッドストーンも保守党や国内世論に押されて、自分の意志に反して救援軍をハルトゥームに送ったが到着2日前、1885年1月26日に、マフディによるハルトゥーム攻撃がおこなわれゴードンは殺害され、その首は切られ、マフディの陣営に運ばれた。2月5日、その知らせがイギリスに達すると、国民あげて、その死を悼んだ。本国だけでなく植民地も深い悲しみにおおわれた。イギリスでは国家の追悼がおこなわれ、ウエストミンスター寺院とセントポール寺院の礼拝には王族も出席した。グラッドストーンは、「ゴードンの殺害者」とまで呼ばれるに至った。

列強のアフリカ分割をめぐり、1894年にベルリン会議が開かれ、ヨーロッパ列強による植民地獲得を容認した。このあと、グラッドストーンの意図に反して、イギリスはアフリカに進出するが、同時にドイツ、フランスもアフリカ分割に乗り出し、植民地争奪戦は続いた。

1897年の末から、キッチナー軍の7500のイギリス兵と、1万2500人のエジプト軍は進撃して、1998年9月2日、オムドルマンの近くの平原でマフディ軍と対戦した。突撃してくるマフディ軍にたいして、小銃、機関銃、大砲を浴びせ、1万1000人を殺し、1万6000人に傷をおわせた。ヨーロッパ側とアフリカ人の武器の違いを示すことになった。

「オムドルマンの戦いの翌日、ハルトゥームの総督官邸の廃墟の上にはイギリスとエジプトの国旗が掲揚された」(James 283)そして従軍牧師による追悼礼拝が行われた。

キッチナーはハルトゥームの仇を討った英雄として帰国し、10月27日、ドーヴァーに上陸した。国民の歓迎ぶりはすごかった。

彼(キッチナー)とジミー・ワトソンはロンドン・チャタム・ドーヴァー鉄道の特別列車で、終点のヴィクトリアへ着いた。そこでの光景はすごかった。鉄道会社はハルトゥームの英雄、ゴードンの仇を討った者、ファッションダのたくみな外交官(イギリスとフランス関係は一触即発の危機にあった)を迎えるために、あらゆる階級の人たちがこれほど集まるとは思わなかった。(中略)すべてのロンドン市民は彼を見ようとした。そして、公式の歓迎使節をのみこんだ。そのなかには、ロバーツ、ウルズィー、イーヴリン・ウッドが含まれ、また、スーダンでキッチナーとともに軍務につたふたりの王子もふくまれていた。『タイムズ』の伝えるところによると、最近の事件、ベルリン会議後のビーコンフィールド卿やソールズベリ卿の帰国でさえもこのような一般大衆の喜びの表現はなかったのである。(Pollack 153)

このような歓迎と比べてみると、「サハラ砂漠に住みたくないわ」、「ハルトゥームなどどうでもいいわ」(R 288)というアーシュラの言葉は当時の興奮に水をかけるものである。

## 2 『虹』におけるボーア戦争

後述するようにイギリスがトラスヴァール共和国を支配しようとしたことからボーア人は反発し、クリューガー大統領は、イギリス軍の国境からの撤兵を求める最後通牒を発した。イギリスがその要求に応じないので、1899年10月11日にイギリスに宣戦布告し、ボーア戦争が勃発した。『虹』では次のように述べられている。戦争が始まるとスクレベンスキーは南アフリカに出征する。

それから南アフリカのボーア人にたいして、宣戦が布告された。いたるところで興奮が渦巻いた。彼は出征しなければならないという手紙をくれた。そしてお菓子の箱を送ってきた。

彼女は彼が出征すると考えて、すこし面食らった。どう感じたらよいのか分からなかった。それは彼女が小説ではよく知っているが、実際にはほとんど理解しない、一種なロマンチックな状況であった。

.....

戦争という考え全体が彼女をととても不安にした。男たちが、互いに組織的に戦いはじめたとき、宇宙の

支柱が割れ、全体が底無しの穴に転がり落ちるように思えた。おそろしい、底無しの穴に落ちるような感情を彼女は持った。しかし、もちろん戦争にはロマンス、名誉、それに宗教という甘い味が上塗りしてあった。彼女はとても混乱した。(R 303)

アーシュラの反応は、戦争に反対ということではなくて、まずは混乱だったと述べられている。自分を愛していると信じていた恋人がいきなり、自分を捨ててどこか遠い所に行ってしまふからである。

他方、スクレブンスキーは次のように考える。

自分は、全体の大きな社会的組織、国家、現代の人間のなかでレンガにすぎない。自分の個人的な行動は小さく、完全に従属的である。個人的理由は何であれ、全体の形が破られないで確保されねばならない。なぜなら、どんな個人的理由も、それをこわす正当性はないからである。個人的な親しみなど、どうして重要なのか。人は、全体、人間の精妙な文明の偉大な枠組のなかの自分の場所を満たさねばならない。それだけなのだ。「全体」が大事なのだ。その一単位、個人は「全体」を表わす以外は、まったく重要ではない。(R 304)

こう考えて、彼はアーシュラを離れる。愛情などという個人的感情など何事でもないのだ。全体が大事なのだ。自分は一部なのだ。こういう考えのスクレブンスキーは次のように否定される。

彼の本質的な生命にたして、彼は死んでいた。彼は死者からよみがえることはできなかった。彼の魂は墓場にあった。彼の生活は既成のものに秩序にあった。彼は五感をもっていた。それを満足させることは必要であった。これを別にすれば、彼は偉大な既成の、既存の生の「観念」を表していた。こういう存在として、彼は重要であり疑問の余地がなかった。(R 304)

アーシュラとスクレブンスキーの間には、国家と個人の関係について根本的な意見の相違がある。スクレブンスキーにとっては国家が大事であるが、アーシュラにとって大切なのは国家ではなくて個人なのであり、個人の愛情なのである。国家が大事だと考えるスクレブンスキー

は国家のためになることをよるこんで南アフリカへ行く。ただ彼には、その戦争がどのような種類のものであるかという認識はなかった。

南アフリカからは戦争のニュースが来る。

週がゆっくり過ぎた。いつも戦争の悪いニュースが来た。外の世界に災害、彼女を傷つける災害があるのを感じた。彼女のなかにある何かは冷たく、無感動で、無変化であった。(R 309)

「戦争の悪いニュース」は後述するように、ポーア人の激しい抵抗にあつてイギリス軍が大損害を受けたことをさしている。

アーシュラは、ばくぜんと南アフリカの戦争について、新聞を読んだ。それは彼女をみじめにした。彼女はそれとできるだけ関係をもたないようにした。しかし、スクレブンスキーはそこに出征しているのだった。彼はときおり、はがきをくれた。しかし、あたかも、スクレブンスキーの方向には窓もなければ、出口のない壁しかないようであった。記憶のなかのスクレブンスキーにしがみついた。(R 331)

アーシュラが戦争と「できるだけ関係をもたないようにする」ということは、悲惨な戦況に目をふさぎたかったということである。しかしそこにスクレブンスキーがいるということも事実であった。

### 3 ポーア戦争にいたる経過

ポーア戦争の遠因は17世紀の半ばにさかのぼる。1652年、はじめてオランダ人がケープに上陸した。これは、オランダ東インド会社の貿易船の中継地点を確保するためであった。ここで船員に供給する野菜をつくり、原住民のコイコイ族(ホッテントット族)から牛を手に入れるためであった。

この企ては成功しなかったでオランダ人は植民をはじめた。植民者は野菜をつくることだけでは満足せず、大規模な農業のための土地を獲得しようとした。オランダ人だけでなくドイツの新教徒、フランスのユグノー教徒も来た。800人に増え、従来のケープタウンの境界を越えた。すでに原住民がいるのだが、新教徒たちにとって、土地は自分たち選民のものであるという意識があり、

侵入していくことになった。

1795年、イギリス人がこの地に來た。ナポレオン戦争中で、名目はボーア人をフランスから守るためであった。この戦争後、イギリスはケープを獲得した。ケープはスエズ運河開通までは、イギリスのインドへの道として重要であった。イギリス人の支配から逃れるためにボーア人はケープを出て北上した。

1836年から1840年の間に約6000人のボーア人は、幌馬車を牛にひかせて北に向かった。ふたつのグループに分かれた。ひとつのグループは、トランスヴァールに向かい、他は、ナタールに向かった。後者が、1838年、槍を武器とするズールー族の攻撃を受けたが、小銃によって3000人を殺して撃退した。そしてふたつの共和国、トランスヴァールとオレンジ自由国をつくった。1852年、サンド川条約によって、イギリスはトランスヴァール共和国を認め、1854年、オレンジ自由国も認めた。

これで一応、ボーア人とイギリスの関係は安定したが、これを壊したのが、ダイヤモンドと金の発見である。1867年に、ダイヤモンド鉱脈がオレンジ自由国で発見されると、イギリスはダイヤモンド産出地域を併合した。これにたいしてオレンジ自由国が抗議すると、1875年、イギリスは9万ポンドの賠償金を支払った。それは埋蔵ダイヤモンドの価格に比べれば雀の涙であった。セシル・ローズはダイヤモンド採掘会社を経営して富豪となった。

トランスヴァールは財政難に陥り、またズールー族の攻撃を受けて危機に陥ったので、イギリスは1877年に併合し、1879年ズールー族を撃破した。脅威が去ると、トランスヴァールはイギリスの支配を嫌い独立戦争を起こした。この第1次ボーア戦争(1880-1)において、イギリスはボーア人の戦力をみくびっていた。1881年2月27日、マジバ・ヒルに布陣したイギリス正規兵500名はボーア人の攻撃を受けて、その半数以上が戦死か負傷し、また捕虜になった。この結果イギリスはトランスヴァール共和国の独立を承認した。

1886年にトランスヴァールで金鉱が発見されゴールドラッシュがはじまった。1890年、鉱山富豪、セシル・ローズはケープ植民地の首相になった。採掘したダイヤモンドや金は、積み出しのルートがケープ植民地である限り、イギリスに利益をもたらすのであるが、トランスヴァールは迂回して南東岸のポルトガル植民地を通して積み出すことを考えた。このルートではイギリスの利益になら

ないので、ローズはトラスヴァール政府転覆を狙った。

1896年12月29日、ヨハネスバーグで政府を倒すためにジェームソンが蜂起した。蜂起するとともに、そこに居住している外国人、主にイギリス人労働者が参加することを期待した。しかし彼らは蜂起に同調せず、失敗した。ジェームソンは逮捕された。ローズは中止命令を電報で送ったが間に合わなかった。中止命令を出すことで責任をのがれる口実とし、しかし、わざと遅らすことで実質的にはバックアップしたという説もある。ローズは責任を問われ、ケープ植民地の首相を辞職した。ジェームソンはイギリスの裁判を受けて、処罰は軽かった。

蜂起による政府転覆が失敗したあと、ケープ植民地総督ミルナーは、トランスヴァールに対するイギリスの宗主権の承認、居住するイギリス人労働者に選挙権付与などの要求をクリューガー大統領に示して交渉したが、拒否された。1898年2月、5年前の2倍の得票で大統領に再選されたクリューガーはイギリスにたいして国境からのイギリス軍の撤退などを要求する最後通牒を出した。

戦争は次の5つの局面に分けることができる。

第1局面 ボーア軍の攻撃。1899年10月11日、最後通牒の期限が切れると、ボーア軍はケープとナタールに侵入。ダイヤモンド産業の中心地、ケープ植民地のキンバリを包囲。イギリスは、訓練を受けていないボーア人の兵士が相手なので、クリスマスまでには戦争は終了するだろうと予想していたが案に相違して、3年近い長期戦に発展。

第2局面 イギリス軍の反撃。1899年10月30日、ブラー司令官到着。12月、マーガズフォンテンにおけるイギリス軍の敗北。

第3局面 ロバーツの指揮下でイギリス軍の攻撃。1900年1月、イギリス軍はスパイオン・コップで敗北。2月15日、イギリス軍がキンバリを救援。1900年5月18日、イギリス軍はマフェキングの包囲を破る。

第4局面 ゲリラ戦と通常戦。1900年3月17日、ボーア軍はゲリラ戦を決定。

第5局面 ゲリラを掃討するため、キッチナーは非戦闘員をコンセントレーションキャンプに収容。この宿舎で2万8000人が死亡したため世界の世論の非難を浴びる。

1902年5月31日、平和条約署名。戦死者はイギリス軍、2万2000人、ボーア人、2万5000人、アフリカ原住民、1万2000人。

#### 4 ポーア戦争とイギリス人の反応

ポーア戦争は、ポーア人たちの国、トランスヴァールとオレンジで金鉱とダイヤモンドが発見されたため、それを獲得しようとするイギリス人によって起こされた帝国主義の侵略戦争であった。しかし、すべてのイギリス人がこの戦争を支持したわけではない。当時の政権は統一党 (Unionist)<sup>2)</sup> が握っていた。首相はソールズベリ (Salisbury) であった。それまでにアイランド自治をめぐって自由党も分裂していた。ソールズベリ内閣での植民地相 (1895-1903) のジョウゼフ・チェンバレン (Joseph Chamberlain) がポーア戦争の実行者であった。

自由党とその支持者の間には3つのグループがあった。第1は、ローズベリ (Rosebery) とグレイ (Grey) が自由党の帝国主義派を形成して、戦争遂行のチェンバレンを支持した。第2は、W.D.ステッド (Stead), G.K.チュスタトン (Chesterton), ヒレア・ベロック (Hilaire Belloc) で、帝国主義そのものには反対していなかったが、南アフリカでのやり方は失敗しているという議論であった。第3のグループはロイド・ジョージ (Lloyd George), ジョン・バーンズ (Burns), J.A.ホブソン (Hobson), ジョン・モーレー (John Morley), ヘンリ・ラブシエール (Henry Labouchere) などで帝国主義に真っ向から反対したが少数派であった。

のちにはイギリス首相となり、第1次世界大戦でイギリスを勝利に導くロイド・ジョージは、ポーア戦争に反対して1900年6月25日の下院で以下のように演説した。

首相は、われわれが、この戦争をはじめたのはマジュバの屈辱の復讐をするためであり、この国の相応の信頼を回復するためであると宣言しました。私は委員諸君にお尋ねしたい。この戦争は、南アフリカ、あるいは、ほかの場所においてイギリスの権威を回復したでしょうか。3万5000人の農民をつぶすために、この国だけではなく、植民地の選抜して、訓練した25万の軍隊が必要とされているのです。私は、セシル・ローズ氏の言葉を根拠にしているのです。この瞬間においても2万人以上のポーア人が従軍していると主張するものはいないと信じます。どうして、そのことが、われわれの権威を回復することになるのでしょうか、あるいはマジュバの仇を討つことになるのでしょうか。遺憾な気持ちでこのことを言うのですが、屈辱感が残

るのです。わが国民が捕虜になっています。だれが恥辱なしで、そのことを考えるのでしょうか。しかし、この戦争において、過去10か月、戦闘において敗北し、その損害はマジュバにおける双方の従軍人よりも多数なのです。われわれは10回以上のマジュバを経験したのです。マジュバの敵を打つとおっしゃいます。マーガズフォンテンやスパイオン・コップを経験すると、マジュバなど影が薄くなるのです。1881年と1884年の条約を反故にしたかもしれません。マジュバの記憶に付着した屈辱は拭い去ったかもしれません。しかしその代わりに冬のさなかに、女や子供たちを家からアフリカの砂漠に追い出す宣言を出したのです。それを、南アフリカにおけるイギリスの威信を回復することと呼びました。反対です。イギリスの威信を傷つけるほかには何の役にも立っていないです。(Koss 144)

マジュバは、1881年イギリス軍とポーア人が第1次ポーア戦争で戦った場所で、イギリス軍が敗北した。この結果、イギリスはトランスヴァール共和国の独立を正式に認めた。ロイド・ジョージに言わせれば名誉回復にも何にもなっていないというのである。かえって名誉を失っているというのである。

ローズを引き合いに出したのは、彼がケープ植民地の首相として、戦争を引き起こした張本人であるからである。張本人さえ小人数のポーア人にてこずっているという、不名誉な事態を認めているというのである。まして、客観的にみれば、この戦争はイギリスにとって不名誉この上ないものだ。

マーガズフォンテンは、1899年12月9日から12日にかけての戦闘の戦場である。隊伍を組んで行進したイギリス軍は、塹壕に潜むポーア軍のために大損害を蒙った。スパイオン・コップはナタールにあり、1900年1月24日から25日の戦場で、イギリス軍は多大の損害を蒙った。1881年と1884年の条約とは、イギリスがトランスヴァールの独立を認める条約で、イギリスはこれに不満であった。「アフリカの砂漠」は、ゲリラに対抗するため、農家を焼き払う政策に出たことを意味する..

また当時勢力を得てきた独立労働党も、この問題について発言している。1899年9月9日、独立労働党の全国管理委員会は次のよう声明文を発表した。

独立労働党の全国管理委員会は政府のやり方に抗議

する。政府の政策は、その意図が征服戦争を挑発して鉄面皮な搾取者の利益のために、完全な管理を確保するという前提からしか説明できない。侵略戦争は、いかなる状況においても文明社会の道徳感覚にたいする侮辱であるが、現在の場合、とくにそうである。それは目指す真の狙いのきたなさを考慮すれば自明である。(Koss 15)

1900年10月29日の『マンチェスターガーディアン』の社説では次のように独立労働党のケア・ハーディ(Keir Hardie)の意見を紹介している。

氏(ハーディ)は、次のことを指摘したがそれは正しい。自由主義と、チェンバレン氏の帝国主義は敵対するものであり、互いに排除するものである。自由党員は、そのいずれかを選ばなければならない。ケア・ハーディ氏の見るところでは、戦争は軍国主義へ向かう全体の動きのなかのひとつの事件にすぎない。過去5年間、政府は軍国主義を助長するために全力をつくしてきたのである。ボーア人が征服されたとき、この仮面の帝国主義は、平和と進歩の恒常的な危険になるであろう。それを不安と見るすべての人にたいして、自由党員であろうが、社会主義者であろうが、行動にたいする共通の基盤を見つけるべきだという氏の忠告は、したがって賢明であり同時に時宜を得たものである。自由党は将来は、まず帝国主義者によって、そのあと自由主義者によって牛耳られるのではないかという氏の恐れには賛成しないが。(Koss 167)

宗教界では非国教会は明確に戦争反対をうち出すが、イングランド国教会は戦争反対を明確にうち出さない。チェスターの主教は、我関せずという感じでこういった。「戦争よりも悪いことはある」(Koss 223)これが国教会の典型的な見解である。

戦争反対の種々の組織が結成された。「トラスヴァール委員会」(the Trasvaal Committee)、「戦争阻止委員会」(the Stop the War Committee)、「全国改革連盟」(the National Reform Union)、「南アフリカ調停委員会」(the South African Conciliation Committee)などであった。(Hodge 120)以上に述べたような組織は、戦争の可否をとう1900年の総選挙「カーキー選挙」では、新聞などによって戦争反対のキャンペーンを展開し

ていた。この選挙は統一党の大勝利であったが、独立労働党では、ハーディをふくめ2名の当選者を出したから、ある程度、戦争反対の主張は認められた。

## 5 ボーア戦争と第1次世界大戦

『虹』はボーア戦争に言及しているが、作者が考えているのは、1898年のマフディとゴードンやキッチナーの戦争のことではない。現在進行中の第1次大戦における国家と個人の問題である。ここが一番問題で、ボーア戦争の話なら過去の話として読むだろうが、この作品は進行中の戦争批判と読める。

アーシュラとスクレベンスキーの間で議論された「国家」と「個人」の問題は、抽象論ではなくて、すぐ目の前にある問題であった。それは具体的に言えば、戦争のために国家が強制的に徴兵することである。第1次大戦が始まった時点では、イギリスには徴兵制度がなかった。徴兵制度は個人の自由を束縛することになるので避けて志願制度をとっていた。しかし、予想を越えた激戦で人的消耗が激しく、志願兵士でまかなうことは不可能になった。1916年1月にいたって強制徴兵法は成立するが、『虹』執筆の時期には徴兵の動きが強まっていた。『虹』は1915年9月30日に出版されたが、その月の『タイムズ』紙の投書欄には「自由と義務」という投書があり、その一部には次のようにある。

国民動員の呼びかけによって侵害されると考えられている「個人の自由」(personal freedom)とは一体何でしょうか。また、それを口にするだけでも、犯罪になる「強制」(compulsion)とは何でしょうか。個人の自由とは、それ自体、無制限でもなく、ルソーのこととは違って生まれつき、あるいは生得権として、どの人間にもそなわっているわけではないのです。むしろそれは、他人の同様な権利によって制限されているのです。そして、その享受は、国家(the State)の援助によってのみ可能なのです。国家こそ、われわれ各自にとって安全であり保証なのです。国家なくしては個人は無力です。

(9月7日9頁)

これは、個人は国家の一部であるとするスクレベンスキーの考え方である。こういう見方から『虹』を読めば、その作品が、戦争遂行の害になっていることが分かる。

『虹』が第1次大戦反対であることは読者に感じられた。ジェームズ・ダグラスは、1915年10月22日の『スター』紙上の書評で『虹』を酷評する。

戦争の風がわれわれの生活の上を吹いている。それは平和の有害な病菌を殺している。『虹』のようなものは、戦争の風のなかで存在する権利がない。それはわが公衆の健康を守るためにどこに発生しようと衛生士官の手をわずらわして徹底的に駆除してもらわねばならない伝染病よりも恐ろしい脅威である。(Draper 94)

ダグラスの批評はある点で的を射たものである。そこまでは言っていないが、戦争反対を作品からかきとっている。このあと『虹』は発売禁止になる。禁止の理由に「思想、観念、行動のわいせつ」(Draper 102)という言葉が使われており、戦争反対ということは明言されていない。ただ、すでに引用したようなアーシュラの発言を進行中の戦争にたいする批判と読んだ者はいるだろう。

強制徴兵法が議会を通過するのは1916年1月のことであるが、『虹』では徴兵法の成立を予言するかのよう書き方がされている。国家と個人の関係は、国家が徴兵法によって個人を戦場に駆り立てるということである。実際に作者は、戦場に行くことはなかったが、徴兵検査を受けることになった。職業軍人であるスクレブンスキーたちだけでは戦争は遂行できないことを意味している。

## 6 『虹』とインド

スクレブンスキーは南アフリカからは無事帰国する。しかし、今度はインドへ行く。帝国主義の一端をになうような動きである。

スクレブンスキーはイギリスに戻ってきたが、6か月の休暇後インドに行くことになる。アーシュラがインドに住みたいのかという質問をしたのにたいして彼は答える。

「そう思う。社交生活がゆたかだ。することがたくさんある。狩猟だとかポロだとか、いつも立派な馬がいる。たくさん仕事。する事がいくらもある」(R 411)

ボーア戦争を指導したキッチナーも戦争後、1905年にインドへ総司令官として行く。そこでインドに視察旅行に来た皇太子夫妻(後のジョージ5世夫妻)を接待している。(Pollock 332)当時のインドは大英帝国のゆる

ぎない植民地だった。スクレブンスキーもまた、支配階級のひとりとして、楽しい生活を送ることができるだろう。インドに行く彼についてアーシュラは思う。

彼女は、彼がインドでよい暮らしをしている姿を想像した。支配階級のひとりで、古い文明の上に乗っかり、彼自身の文明よりも不体裁な文明の主人になる。それは彼が選ぶことだ。彼はまた貴族になり、権威を付与され、責任をもたされて、無力な多数の人びとを自分の下におくのだ。支配階級のひとりとして、彼の全存在は、国家のよりよい観念の達成と、実行に捧げられる。インドでは、本当にする仕事があるだろう。あの国は、彼自身が代表している文明を本当に必要としているのだ。その国は彼の道路と橋梁を必要としている。その国の啓蒙の一部を彼は担うのだ。彼はインドに行くのだ。しかし彼女の道はそれではない。(R 411)

スクレブンスキーはインドの支配階級になる。誘われるがアーシュラはインドへは行かない。これは個人的にスクレブンスキーをあまり好きではないからインドへ行かないという意味でもあるが、帝国主義のインド支配批判ともとれる。

## 結 語

ロレンスは、『虹』のヒロイン、アーシュラよりほぼ2歳下で、ボーア戦争勃発のころ、大体、14歳である。だから個人的にもその記憶があっただろう。したがって、その戦争への言及は作品にあるのは当然であるが、もうひとつ、ボーア戦争に言及する理由は、当時進行中の第1次大戦を批判したいからである。

『虹』は、先行する原稿があるが、『虹』としての最終原稿の執筆は、1914年11月から1915年3月であり、短期間で終わると思われた第1次大戦が膠着状態になり、徴兵の必要が叫ばれはじめた時期である。作品のボーア戦争は第1次大戦と重なる。

ここで述べられているマフディ教徒の平定、ボーア戦争にたいする反戦的な発言、また国家の存在にたいする批判的な姿勢は好戦的な愛国者を怒らせた。『虹』は1915年11月、発売禁止となったが、反戦という明確な理由は述べられていないが、そこに戦争批判を十分読みとることができる。戦争、国家、個人関係を考えさせる作品である。



## 注

- 1) ロレンスは原稿の段階で、マフディ教徒の反乱ではなく、ズールー戦争にしたという。注釈者によれば、1899年の時点からは12年前の1887年までには、ズールー戦争は決着のついた戦争では時局性はとぼしかった。(R 521)ズールー戦争では、1879年1月、南アフリカの原住民で、白人の植民化に抵抗するズールー族とイギリス軍が戦った。イギリスの帝国主義への言及であることは同じであるが、ハルトゥームの方がイギリス人の愛国心を逆なでするには都合がよかった。
- 2) 1886年に、自由党のグラッドストーンはアイルランド自治法案を議会に提出したが、これをめぐって自由党が分裂した。法案に反対者が自由党を脱党して統一党に入り、自由党は1995年に政権を失った。1995年よりソールズベリーの統一党内閣ができ、1902年まで続いた。

## 主要文献

- Dickson, W.K-L., *The Biography in Battle: Its Story in the South African War*. (Originally Published by T.Fisher Unwin, 1901) Wiltshire: Flicks Books, 1995.
- Draper, R.P., *D.H.Lawrence: the Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1970.
- Evans, Martin Marix, *Encyclopedia of the Boer War 1899-1902*. California: ABC-CLIO, 1988.
- , *The Boer War: South Africa 1899-1902*. Oxford: Osprey Publishing, 1999.
- Field, Laurie, *The Forgotten War: Australia and the Boer War*. Victoria: Melbourne University Press, 1995.
- Jackson, Tabitha, *The Boer War*. London: Channel 4 Books, 1999.
- James, Lawrence, *The Rise and Fall of the British Empire*. Abacus, 1994.
- Knight, Ian, *The Boer Wars (1) 1836-1898*. London: Osprey Publishing, 1996.
- Knight, Ian, *The Boer Wars (2) 1898-1902*. London: Osprey Publishing, 1996.
- Koss, Stephen (ed.), *The Pro-Boers*. Chicago: The University of Chicago Press, 1973
- Krebs, Paula M., *Gender, Race, and the Writing of Empire: Public Discourse and the Boer War*. Cambridge: Cambridge University Press, 1999.
- Krikler, Jeremy, *Revolution From Above Rebellion From Below: The Agrarian Transvaal At The Turn of The Century*. Oxford: Clarendon Press, 1993.
- Kruger, Rayne, *Goodbye Dolly Gray: The Story of the Boer War*. Pimlico, 1996.
- Lawrence, D.H., *The Rainbow*. Cambridge: Cambridge University Press, 1989. (R)
- Lowry, Donal, *The South African War Reappraised*. Manchester: Manchester University Press, 2000.
- Miller, Stephen M., *Lord Methuen and the British Army: Failure and Redemption in South Africa*. London: Frank Cass, 1999.
- Morgan, Kenneth O. (ed.), *The Oxford History of Britain*. Updated Edition. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Nasson, Bill, *The South African War 1899-1902*. London: Arnold, 1999.
- Pakenham, Thomas, *The Boer War*. London: Abacus, 2000.
- Pollock, John, *Kitchner*. London: Consatable, 1998.
- Pretorius, Fransjohan, *The Anglo-Boer War 1899-1902*. Cape Town: Struik Publishers, 1998.
- Riall, Nicholas (ed.), *Boer War: The Diaries and Photographs of Malcolm Riall From the War in South Africa 1899-1902*. London: Brassey's, 2000.
- Schoeman, Karel (ed.) *Witness to War: Personal Documents of the Anglo-Boer War (1899-1902) from the collections of the South African Library*. Cape Town: Human and Rousseau, 1999.,
- Smith, Iain R., *The Origins of The South African War 1899-1902*. London: Longman, 1996.
- Smith, M. Van Wyk, *Drummer Hodge: the Poetry of the Anglo-Boer War 1899-1902*. Oxford: Oxford University Press, 1978.
- Stockman, R.G., *The Boer War Diaries of Major H.G.D. Shute and Private G.J. Glullic: 2nd Battalion Coldstream Guards 1899-1902*. Somerset: The Anglo-Boer War Philatelic Society, 1999.

Stone, Jay, and Schmidl, Erwin A., *The Boer War and Military Reforms*. Lanham: Atlantic Research and Publications, 1988.

van Hartesveldt, Fred R., *The Boer War: History and Annotated Bibliography*. Westport, C.T.: Greenwood Press, 2000.

Verney, David (ed.), *The Joyous Patriot: The Correspondence of Ralph Verney 1900-1916*. London: Leo Cooper, 1989.

### Summary

This essay is an attempt to consider D.H. Lawrence's *The Rainbow* by referring to the historical background, such as the Mahdist Rebellion, the Boer War. In the year when General Gordon was killed by the Mahdists, D.H. Lawrence was born. When he was about thirteen years old, Kitchner defeated the Mahdists, and the next year the Boer War broke out. It is quite natural these historical incidents are described in his novels. *The Rainbow* can be understood better if references are made to the Mahdists and the Boer War. Furthermore the novel implicitly refers to the World War I, which is going on when it is being written, and it advocates the freedom of the individual.